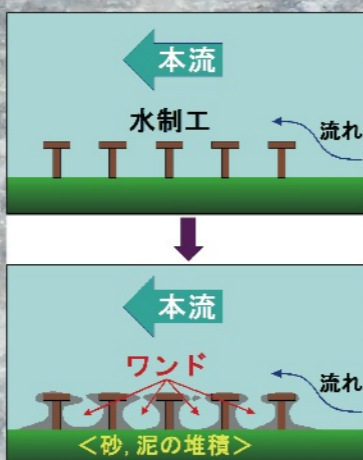


◆ワンド◆

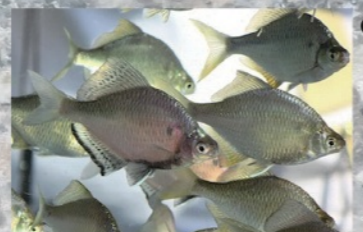
「淀川の特徴的な河川環境は？」と問われて最初に思い浮かぶのは『ワンド』ですが、『ワンド』とは一体どういうものなのでしょう？『ワンド』は本来それを作ろうと思って出来たわけではなく、河川構造物の二次的な作用で出来上がったものなのです。河岸からほぼ垂直に川の横断方向に伸びた「水制工」という構造物がありますが、これは、川の流れを中央に集めることによって流心部の深掘れを誘発し、船運利用のための水深を確保する目的で設置されたものです。同時に、上流から運ばれた土砂が「水制工」の周りに堆積し、浅場や陸地が形成されました。この陸地によって囲まれた流れの緩やかな溜まりが『ワンド』なのです。淀川には「城北」「庭窪」「楠葉」といった大規模なもの他、左右両岸にいくつかの『ワンド』が残されています。かつて『ワンド』は数多く存在していましたが、河川改修が進み川の安定性が増すとともにその数を減らしました。同時に『ワンド』を利用していた生物達も数を減らし、姿を消してしまったものもあります。近年、補修工事や水位調節などによって、生き物にとって重要な環境である『ワンド』の再生が進められています。そういった中、一時は姿を消した淀川のシンボル・フィッシュであるイタセンバラも様々な努力により野生復帰を果たしました。正確に言うと『ワンド』は、純粋な自然環境ではなく、里山や植林、田畑、用水路やため池などと同じように人間の活動によって出来た二次的な自然環境です。ただ、生き物達はこの二次的な自然環境を棲息の場、繁殖、採餌の場などとして上手に利用して命を育んできました。我々はこうして作り上げられてきた環境や生物の多様性も守っていく必要があるのではないのでしょうか。



●ワンドの俯瞰図
上流から水とともに土砂が流れ、水制工の周辺にたまり、ワンドが形成される。



●城北ワンド群



●イタセンバラ

環境省 環境カウンセラー
NPO法人 nature works
池田 哲哉

水辺の博物誌



溪流の異邦人。

アマゴ *Oncorhynchus masou ishikawae*

淀川水系と関わりのある山間部で、近頃アマゴの姿が見られるようになったと聞きます。古くから淀川水系をご存知の方なら「えっ、アマゴが？」と思われるでしょう。たしかにアマゴが府内の河川で生息しているという記録はほとんどありませんが、実は近年、放流によって水温が20℃以下の溪流域では繁殖しているようです。成長したアマゴが海へ降りて名前が変わるサツキマスは「大阪府レッドリスト(2014)」で情報不足となっていることから、もともと生息していなかったか、個体数が極端に少なかったのでしょうか。ブラウントラウトやニジマスは国外外来種ですが、近年増えているアマゴもまた、国内移入種であり、即ち大阪府下では外来種なのです。(画/森本宏美)



来た・見た・聞いた 淀川雑記帳



私がレンジャーになったのは6年前のこと。初めての活動は「淀川の淡水魚を深く知る」という講座であった。大阪教育大学の長田芳和先生を講師に招き、さまざまな産卵行動を学んだ。先生の人気はすごいもので、定員の倍の人数となり30分延長であった。今年は私のレンジャー生活最後の年。

来る10月7日に、もう一度、先生にお願いして「淀川水系の淡水魚講座」を開催する。ヨドゼラの発見者、川瀬成吾先生のお話と2本立て。淀川の魚が丸ごと勉強できる絶好のチャンス。淀川管内河川レンジャーHPに詳しい案内があるので、お気軽にお申し込みを。

(編集長・石山郁慧)

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史 淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

ハス

Opsariichthys uncirostris uncirostris

コイ目コイ科ダニオ亜科の一種。本来の分布は、琵琶湖・淀川水系、福井県の三方湖に自然分布していましたが、琵琶湖の稚アユの放流に伴い、もともと分布していなかった地域からも確認されています。国外では中国大陸西部からも知られています。

河川の中・下流域の流れの緩やかなところに生息し、体長は、最大で30~35cmほどになります。オスはメスに比べて大型に成長し、オイカワによく似たやや淡い婚姻色や追星がみられます。河川では水がきれいな流れの速いところから緩やかなところまで生息し、湖沼などの止水域では表層近くを群泳するなど多様な環境にみられます。繁殖期は5~8月で、流れの緩



やかな浅瀬の砂礫の中に産卵します。動物食が強く、成魚になるとアユやヨシノボリなどの小魚を食べる魚食性で、コイ科の中では非常に珍しい習性。このため、ハスの口は特徴的な「へ」の字形に曲がっているため、他の魚と見分けることができます。あまり食用にはされていませんが、天ぷらや唐揚げ、煮つけなどにハス利用される地域もあります。飼育は、やや難しく、遊泳力に富むため大型水槽で、水槽外への飛び出し防止などの対策も必要です。釣りではルアーやフライフィッシングの対象として人気があります。環境省のレッドリストで絶滅危惧II類に指定されています。



the waterside

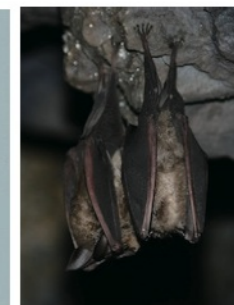
花想鳥感

四季折々、
水辺の生物多様性

高槻市立自然博物館 主任学芸員
高田 みちよ

河川公園のコウモリ

夏の日没時の鶺鴒では、たくさんのツバメがねぐら入りするのが見られます。夕焼けを背景に3万羽ものツバメが乱舞するのは夏の風物詩。わざわざ行かなければ見られないのは残念ですが、人生観が変わるほど壮観なねぐら入りです。そして、ツバメのほとんどがヨシに止まった後の暗い空に残るのは、コウモリです。空を自由自在に飛べる哺乳類のコウモリ。鳥と違って人差し指から小指が長く伸び、その間の皮膜を使って飛びます。よく目にするのはアブラコウモリだと思われがちですが、時にはキクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリ、テングコウモリ、ヤマコウモリ、ヒナコウモリなども飛んでいると思われがちです。断定できないのはコウモリは鳥と違い、どれも薄暗くなってから飛んでいるので、人の目では見わけが付きません。そのせいか調査をしている人が少なく、同じく空を飛ぶ鳥と違って観察データがとんでも少ないので、どんな種類がどのくらい生息しているのか、よくわからないのが現状です。バッドディテクターという機械は、人の耳には聞こえない高い周波数の鳴き声を低い音に変換してくれるので、上空を飛んでいるコウモリの種類がわかります。アブラコウモリやヤマコウモリは、ぎりぎり人の耳にも聞こえるので、チチチと鳴いているのが聞こえることもあります。このようなコウモリは鼻がとがっていて、高周波（いわゆる超音波）をフル活用しているわけではないようです。



◆写真提供 / 池田哲哉
(左) アブラコウモリ
(上) キクガシラコウモリ

鼻にピロウというヒダがついているキクガシラコウモリなどではもっと高い高周波を発します。多くの人が血を吸うと思っているようですが、日本には吸血コウモリは生息していません。日本のコウモリは小さな虫を食べています。昼はツバメが食べているような飛ぶ虫を、夜はコウモリが食べているのです。そして、アブラコウモリはみなさんの家の雨戸の戸袋や瓦のすき間なので寝ているかもしれません。意外と身近なコウモリ。夜の空を眺めてみてはいかがでしょうか。

the sky & land

水辺の

虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省 環境カウンセラー 川島 大助

ナガレトビケラの仲間

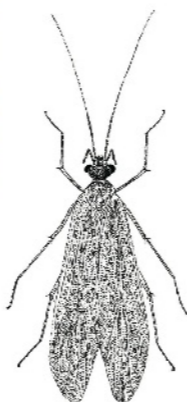
夏から秋になり、飛翔する水生昆虫は水辺で産卵し徐々に減る一方で、水中は水生昆虫の幼虫達で賑やかになります。今回ご紹介するナガレトビケラも幼虫期は水中で過ごす水生昆虫です。

幼虫は細長く体長14mm程度、頭・前胸部はキチン質で赤茶~黒褐色、中胸・後胸・腹部は膜質で薄茶~緑色等様々です。トビケラ目は巣をもつ種、捕獲網を造る種等がありますが、本種は何もたず石の表面を匍匐して生活します。細長い体は他のトビケラ類に比べて弱そうに見えますが、肉食性(小型の水生昆虫等を捕食)の種類が多いようです。成長した幼虫は、砂粒を寄せ集めて繭を造り、蛹になります。

本種は水質の指標生物でもあり、きれいな水域のスコア値9とされています(スコア値1~10の10段階で、10ほど清冽な水域の指標になる)。淀川では三川合流付近や木津川、桂川、宇治川、支流の安威川、芥川の瀬の礫帯で見ることができます。石を取り上げて、石の裏側を探してみると、匍匐する細長いナガレトビケラを見つけることができますよ!



ナガレトビケラの幼虫



成虫になるとイラストのような姿となる。

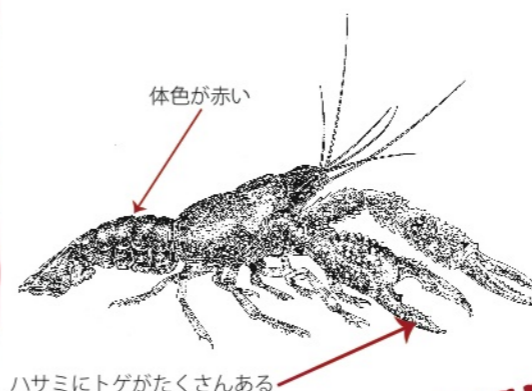
the worst 100

侵略的外来生物

淀川ワースト100

アメリカザリガニ科 アメリカザリガニ
Procambarus clarkii

淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧



AN INVADER

小さな子どもでも簡単に捕れる馴染みのある生物であるが、本来日本には生息していなかった。アメリカのミシシッピ川流域を中心に生息していたものを、1927年にニューオーリンズの業者から食用ウシガエル養殖用の餌として日本に持ち込まれたのである。

北海道から沖縄にかけて日本各地に分布。生態系に大きな影響を及ぼしていることから、環境省によって「要注意外来生物」に指定された。また、日本生態学会によって作成された「日本の侵略的外来種ワースト100」にも選定。水草を切断したり、水生昆虫を捕食するなど外来種の生態を脅かす存在。駆除するにはかなりの期間、継続しなければすぐに増えてしまう。



私の場合、駆除したものは保護亀のエサとして活用している。

